

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 12 月 1 日現在

機関番号：30112

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23614018

研究課題名(和文)観光地のライフサイクルに配慮した、地域計画に関する研究

研究課題名(英文)A study about the regional plan in consideration for the tourism area life cycle

## 研究代表者

中鉢 令兒 (CHUBACHI, REIJI)

北海商科大学・商学部・教授

研究者番号：50188497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の結果は、市町村の観光振興政策で、現状を捉える手法を欠いている施策が散見される。観光先進国では、S.Plogモデルが観光地の現況を捉えるモデルとして汎用され、さらにその実用化段階のTALCモデルが活用されている。本研究では、代表的日本の観光都市を取り上げ時系列的に整理した。TALCでの発展段階を把握しつつ目的地のS.Plogモデルで観光客の特性を把握し、中期的な増減傾向についてパターンモデルで考察することが有効であることを明らかにした。観光資源は、情報化社会を背景にメディアによる新しい「まなざし」によって生まれる現在も、TALCモデルは、将来の方向性を探る手法として有効である。

研究成果の概要(英文)：As for the result of this study,

As for the sightseeing promotion policy of cities, towns and villages, technique to capture the present conditions lacks. In the sightseeing developed country, The S.Plog model is used as a model catching the present situation of the sightseeing spot. Furthermore, the TALC model of the practical use stage is utilized. In this study, I took up a tourist city of representative Japan and arranged it for chronological order. In the sightseeing spot, it is grasped a development stage in TALC This study grasped the tourist characteristic of the place in S.Plog model. In the period when it is short, it is effective to consider in a pattern model. The tourist attractions are born by new "tourist gaze" by the media backed by an information-oriented society. The sightseeing spot changes by changing resources, but the TALC model is effective to investigate future.

研究分野：観光振興

キーワード：Tourism Area Life Cycle Product Life Cycle S.Plog モデル 地域観光振興の手法 観光地の現状把握 Fadの活用

### 1. 研究開始当初の背景

近年地域経済の活性化に観光産業が果たす役割は大きい。しかし、各観光資源のライフサイクル(寿命)の把握方法は、実用化されていない。したがって「過剰投資」や、「観光政策の適切性を欠く」等事例が多くみられ、地域経済の停滞や疲弊化を招いている場所も多い。本研究は、欧米諸国の観光開発理で活用されている TALC (Tourism Area Life Cycle) Model と P.コトラーの PLC モデルを活用し、観光地での検証を通じてモデルのガイドラインを明らかにする。もって、地域活性化の施策の一つである、観光振興施に寄与することを目的とする。

### 2. 研究の目的

近年地域政策において、観光産業は、欠くことの出来ない要素と成っている。観光産業は、過疎化、高齢化に対処可能な産業として、重要な政策となっている。しかし、その観光政策は、総花的で、他の地域と比較しても集客性の乏しい観光資源に、過度な集客性を期待することが散見される。その背景には、観光の基礎的理論に対する十分な考察に欠けることが散見される。本研究では、こうした欧米の観光理論を基礎として、日本での具体的利活用可能な特徴的な事例を挙げ、観光地のライフサイクルに配慮した、地域計画寄与することを目的としている。

### 3. 研究の方法

ツーリズムエリア・ライフ・サイクル (Tourism Area Life Cycle: 通称 TALC) による観光地分析である。1980年にカナダ地理学会誌で R.バトラーによって「The concept of a tourism area cycle of evolution」で提案されたモデルであり、2006年 TALC の論文集に再録されている。これによると、S.プログの目的地のサイコグラフィックス・ポジションを累積曲線で表示したのが、TALCである。また、補助概念として P.コトラーの製品のサイクル (PLC) のおける比較的長い期間 (広域) 出現れる PLC 共通パターン (Common Product Life-Cycle Pattern) と、短期間的に出現する PLC 特殊パターン (Three Special Categories of Product Life Cycle) の 2 つのカテゴリーパターンを活用した。

### 4. 研究成果

#### 4.1. 連続サイクル-リサイクル型の北海道 TALC

長期の観光客入込数の急激な増加は、Fad 的要素が存在するので、牽引する観光資源の整備改善などハードとソフトの環境整備によってサイクル-リサイクル (Cycle-recycle) へと誘導する必要がある。広域の TALC では、牽引する観光資源とともに、域内の他の観光資源を整備し質的向上や他の観光資源の創出が、以前の観光客集客状態に戻らない方法である。また、新たな牽引観

光資源によって、サイクル-リサイクルの観光地のブランド化へ繋がる点が指摘されよう。

北海道の観光客入込数の変遷は、典型的な連続サイクル-リサイクル型である。この牽引観光資源は、知床観光である。最初の 1970年代の第 1 次知床ブーム (1971 年) によるものである。知床は道東の奥地で前後の宿泊や周遊観光のための観光地が併せて集客人数を増やした。その後の 10 数年は、他の観光資源の整備が進み北海道観光の多様性が確保された。1980 年代から始まる第 2 次知床ブームと知床の世界遺産登録の機運が、北海道観光の牽引を果たした。しかし、斜里町 (ウトロを含む) の観光入込数の TALC では、増減がかなり激しく表れている。観光地の複合化によって北海道レベルでは、ブランド化が進展したと言える。

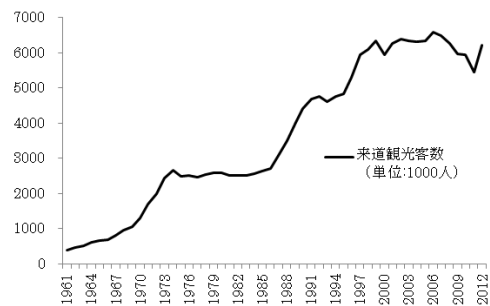


図 1 北海道観光客数の TALC

#### 4.2. 波型の沖縄 TALC

沖縄の観光地化は、第 2 次世界大戦後の 1972 年以降の本土復帰後である。沖縄の観光客入込数の TALC は微視的に見れば凹凸はあるが、全体的には理想的な観光振興である波型である。1975 年の沖縄海洋博覧会、2000 年のサミット開催等による観光地のブランド化と、1992 年の首里城の復元、1993 年の NHK 大河ドラマ「琉球の風」、1979 年の沖縄美ら海水族館の開業と 2002 年の当時世界一の規模を誇る新館の開業、等の観光動機の増加要素が挙げられる。こうした事象が一時的増加を示す Fad 化をもたらすが、その主たる市場である大都市からの距離的遠さと経費の高さから、利便性の高い本州の Fad 化よりも緩やかであり時間的にも分散されて長い。この間に対象観光地の不十分な点が整備され、満足度も高くなる点が推測される。沖縄観光から示唆される点は、Fad 期の集客が、S.プログのニア・アロセントリックな観光客が多数を占め、タイムラグを持ってミドセントリックな観光客の来訪型が観光振興では最も効果的であるといった代表的事例である。違った地点から見れば、アロセントリックな人ほど環境整備 (観光の利便性) にはこだわらず、観光動機の内容を満足させる要素に、評価は集中する特徴を考慮することが肝要である。この要素を満足させる方法として、体験、触れ合い、などが効果的である。こうしたアロセントリックな観光客の満足度を

上げ、その広報的役割を果たす直接的方法が効果的で、その後観光客の多数を占めるミッドセントリックな観光客の誘客をもたらすと考えられよう。

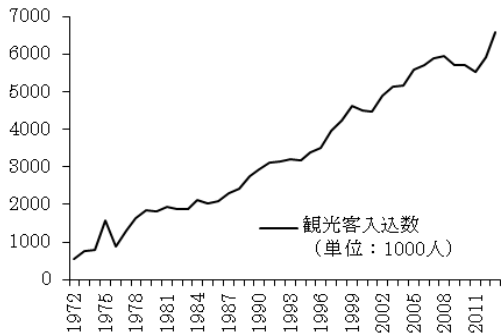


図2 沖縄観光客数のTALC

#### 4.3. サイクル - リサイクル型で地域活性化を図る香川 TALC

香川県は、四国の有数の観光資源を持ち、産業分野においても地域の中心的役割を持っている。観光客入込数は、1987年にFadが出現し、近年で最も多い観光客入込数を記録した。その要因は、瀬戸大橋の開通による橋への関心と利用体験による四国への観光活動であった。その後減少に転じたが、明石海峡大橋の竣工時(1997年)のFadまで平均750万人を記録し490万人を遥かに上まわった。また明石海峡大橋の竣工時(1997年)にFadが生じその後同様に減少するが、平均790万人となり以前よりも増加した。しかし、瀬戸内の島々では、過疎化が進み本州との利便性の恩恵には与らなかった。他方、直島での役場とベネッセ株式会社との、現代芸術による地域づくりの共同企画は、着実の実績を挙げていた。こうした点から、土木建築から文化による地域づくりへの方向転換が模索され、2009年香川せとうちアート観光圏が認定され2010年に瀬戸内芸術祭が実施された。こうした取り組みは、900万人前後の観光客入込数を確保するようになってきている。香川の潜在的観光客入込数は、概ね1987年の1030万人と考えられ、今日の香川の取り組みは、ハード(土木建築)による誘客の当面の目標はなく、直島、豊島の成功事例からソフト(文化)による誘客を進めている。近々では、若者層の支持率の高い現代アートに着目した、2010、2013年に開催された瀬戸内国際芸術祭の成功が挙げられる。

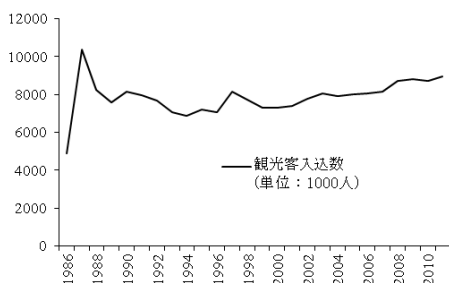


図3 香川県観光客数のTALC

直島は、直島観光協会奥田俊彦(会長)が言及するように、「文化は働く」を実践している町である。この概念は、大原美術館大原謙一郎(理事長)の言葉であるが、倉敷で大原美術館の培った役割から認識したと推測される。この観光地の特徴は、現代美術や現代建築に興味を持つ人の集客がその主たる対象である。また観光産業の視点から分類すれば、経営的には成立しづらいニッチツーリズムをターゲットにした観光振興である。2003年まで衰退も無く持続した点が、過疎地再生に学ぶべき点である。S.プログラムの目的地のサイコグラフィックス・ポジションで観光客の2.5%を占める芸術に興味があるアロセントリックな人々を施設維持観光客として想定して始まり、第2段階としてニア・アロセントリックな人々(計16%)をも誘客して今日の成功を達成している。最初の段階で島内の施設整備とホストである島民に現代芸術への関心と認識を浸透させた。その後1998年の本村地区の家プロジェクトの開始、2004年の地中美術館の開館により観光客の増加が進んだ。また稼働率の高いホテルの増設により滞在型観光客の増加をもたらした。これ以降TALCの変化から見れば、発展期である。また近年の変化を微視的に見れば2010年、2013年の国際芸術祭開催によって観光客入込数は、単年度で急増している。第1回国際芸術祭では、前年比177.0%の637376人、第2回には前年比164.64%、705072人でありFadの性質を持っている。しかしイベント開催は、地域の潜在的集客能力を示しており、イベント要素の恒常的確保が基礎的集客力に転嫁され、達目標が設定可能である。またイベント効果は、地中美術館、李禹煥美術館等の現代美術館と本村地区の家プロジェクトを一体化した観光資源としてホストとゲストに認識される契機となった。この家プロジェクトは、従来から続く空間に現代アートで意味を付けそれに合う最小限の整備を施し、継続性と革新性を持つ地域づくりの手法として画期的なもので、まちづくりの分野で注目された。また観光の分野では、Jアンの「まなざし」の獲得で、観光資源としての要素を創出するに至った。

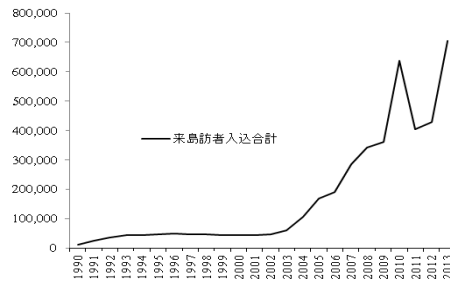


図4 直島の観光客数のTALC

#### 4.4. Fad から観光振興を読み解く：金沢 TALC

金沢市の観光入込数の経年変化についてTALCを見ると、2002年に急激な増加と翌年

の減少が見られる。P.マフィー経済サイクルの区分で考察すると、短期的サイクルでは、NHK大河ドラマ「利家とまつ」を背景に金沢城二の丸広場・金沢城公園で開催された「加賀百万石博」の効果によるピークとショルダーシーズンの出現、中期サイクルでは、ピーク時の潜在集客力の獲得とさらなる増加が、2008年に示されていると考察されよう。加賀百万石博は、観光振興の契機となった点が推測されよう。こうした文化的イベントについて、C.M.ホールは、イベントは観光客の誘致に役立つばかりではなく、「地域社会や広域社会のアイデンティティの成長や維持を助ける」と指摘している。また、C.M.ホールやE.コリンズは、「文化的知識と文化的体験を提供する」とイベント参加の重要な要素について知識と体験を挙げている。C.ガンは、コミュニティツーリズム計画で、コミュニティにインパクトを与える一つとしてイベントを挙げ、「最も早く成長する形態の観光活動は、イベントである」と指摘している。すなわち金沢の持つ知識と体験が金沢の魅力の顕在化がこの博覧会で試されたもので、当時進められていた都市マスタープラン（1995年～）が、イベント化された活動によって有効に実体化したと推測される。2008年のイベント開催時期を上回る魅力度の創出は、地域イベントの機能である、「観光地の空間的魅力」の顕在化と「知識伝達の仕組み」の構築がこの時期に完成されたと思われる。また、2003年から2008年に至る観光客入込数の増加傾向は、地域整備の進行に伴う結果と推測される。こうした地域整備の要になっている金沢市都市計画マスタープラン（1995年：以降金沢都市マス）について俯瞰する。都市マスでは、都市づくりの7つの目標が挙げられている。歴史・文化・伝統を活かしたまちづくり、活力と個性豊かな特徴あるまちづくり、質の高い住環境の形成をめざすまちづくり、総合交通体系の確立による安全で快適なまちづくり、自然と共生するまちづくり、高齢者や障害者等が安心して住める人にやさしいまちづくり、災害に強いまちづくり、である。特に文化的体験にかかわり深い「歴史・文化・伝統を活かしたまちづくり」では、「藩政期来、伝承されてきた都市構造や、そこに培われてきた文化・伝統」を貴重な財産としてとらえ、これらを維持発展させることを中心においている。こうした事業で再生したひがし茶屋や主計町は、金沢観光の代表的個所となった。また、市民団体の金沢観光ボランティアガイドの会の「まいどさん（金沢弁で「こんにちは」）」は1994年に設立され、体験型観光に不可欠なインタプリターを市民参加型で進めていたことも、イベントと観光活動が違和感なく認識された背景と推測され、観光波及効果を大きくさせたと推測されよう。この活動の中心は、今日集客効果の大きいひがし茶屋に、商家の一つをひがし茶屋休憩館として設置さ

れ、その周辺をガイドする「まいどさん」がインタプリターとして常駐している。すなわち地域整備後にインタプリターが創設されたのではなく、以前からの活動がより整備された地域の中で実施された大きな効果を生み出した。

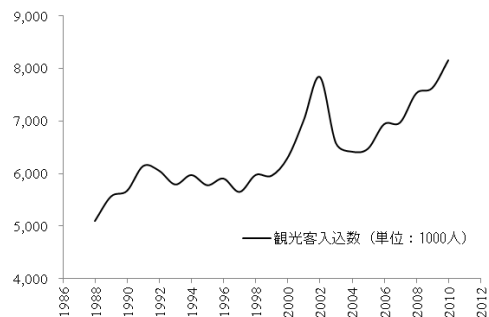


図5 金沢市の観光客数 TALC

#### 4.5. Fad を創る：震災復興神戸 TALC

1995年兵庫県を中心として阪神地方に甚大な被害を与えたマグニチュード7.3の地震は、震源を兵庫県淡路島北部、北緯34度36分、東経135度02分、震源の深さ16キロメートルとする直下型地震であった。また淡路島北部から神戸方面に続く活断層のずれが生じ、神戸で震度6を観測し、その被害は、多くの人命が失われた長田区をはじめ灘区など、死者6434人、負傷者は4万3792人、家屋の被害は全壊10万4906棟、半壊14万4274棟と記録（総務庁）されている。とくに被害は神戸市に集中し、中心部の長田（ながた）区では2日間延焼して、区全域が焼失した。また中央区三宮周辺の耐震設計の鉄筋アパートやビルまで損傷した。また都市基盤であるライフラインも壊滅状態になり、都市機能と経済基盤が破壊された。阪神淡路大震災では、復興を願うイベントとしてルミナリエが実施された。ルミナリエは、夕刻から始められ、遠方からの観光客は、復興しつつある都市施設や、復元とこの機会に整備された、風見鶏の家や萌黄の家付近の環境整備に、未整備の以前より多くの魅力が生まれ始めているのを体験した。またルミナリエは当初より集客人数が減少したが、Fadの様な一過性ではなく災害と都市生活、復興の方法など地震文化の事例として、多くの範例を残した。またルミナリエは、記憶の象徴としてのイベ

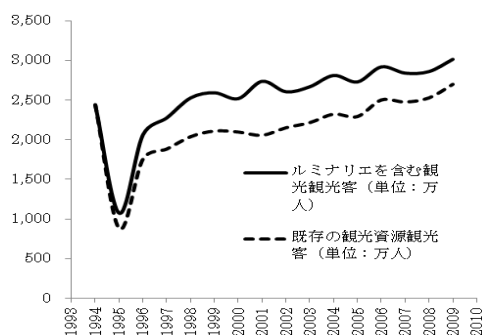


図6 神戸市の観光客数 TALC

ントとして恒久的に観光振興の機能を果たすと推測される。こうした自然災害の復興の重要な手法として、位置づけられよう。

#### 4.6. 偶発 Fad を活用する：境港 TALC

境港の観光地化は、水木しげるの出生地を活かした観光動機づくりを、行政主導で進めた点である。今でこそアニメの聖地巡礼は、観光振興政策の重要な要素であるが、1988年に検討スタート、1992年事業着手の妖怪まちづくりは、その時代には画期的なものである。また水木しげるの漫画の設定が、超時代性であり世代を超えて読まれた点が、一過性のアニメ巡礼にならなかった点である。しかし境港の成功事例は、観光地整備なくしては存在しない。2012年のデータによると境港主要観光箇所と観光入込数との相関関係を示しているのは水木しげるロードである。すなわち観光客の来訪動機は、殆どが水木しげるロードに依ると言っても過言ではない。水木しげるロードは、1993年の妖怪像23体の銅像設置から始まり、2003年には、水木しげるの漫画の背景になった水木の世界を展示した水木しげる記念館が設置された。また妖怪像も順次増加され2006年には120体目がこの記念館の前に設置された。しかしこれらの施設拡充も飛躍的観光客増加にはつながらなかった。しかし、2010年の上半期のNHKの連続ドラマ「ゲゲゲの女房」による観光効果は、2010年の観光客入込数のFadをもたらし、その後減少に転じたが2009年の観光客入込数を下回ってはいない。沖縄と同様利便性によるタイムラグが、Fadを緩やかなものにしていて、このタイムラグを活用し、早急に魅力を増加させる対策が必要である。またパス図より水木しげる記念会館が、創設当時より、水木しげるロードにかなり寄与している点が見える。すなわち相乗効果が形成されていると推測される。



図7 境港市の観光客数 TALC

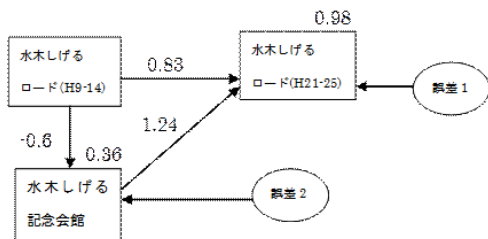


図8 水木しげる記念会館の効果のパス図

#### 4.7. 地域の Fad を活用する：久喜市鷲宮

2004年美水かがみの4コマ漫画がゲーム雑誌「コンプティーク」に連載が開始され、TVアニメは、2007年4月から千葉テレビなどで放送された。その後2008年9月にオリジナルアニメーションビデオが発売された。「Newtype」2007年7月の付録で、鷲宮神社がアニメのロケ地として紹介され、アニメファンが聖地巡礼に訪れるようになった。その後鷲宮商工会事務局は、角川書店と共同でイベントやグッズ製作に取り組んだ。大谷尚之は、こうしたグッズの販売は、ファンの「鷲宮商店街の回遊性を高めた」と指摘している。他方核施設の鷲宮神社は、その初詣客の数値が神社で発表されているが、2005年の6.5万人から、2014年の47万人に至っている。2011年以降47万人保って推移している点は、マーケットの対象の潜在数を示しているしその潜在数はほぼ固定されていると考えるのが妥当であろう。この47万人の交流人口をこの地域の発展のどのような糧にするのかは、地域のまちづくりの在り方に託される。J.アンリが指摘する観光地の要素である「まなざし」が漫画の聖地といった事象で派生した訳である。一般的な「まなざし」とは異なる点は、宮津大輔が現代アートの魅力について「アーティストが同時代を共に生きている」ことを挙げている点と同じである。直島も、十和田市もこの点に着目し多くの共感者を観光客として迎えている。

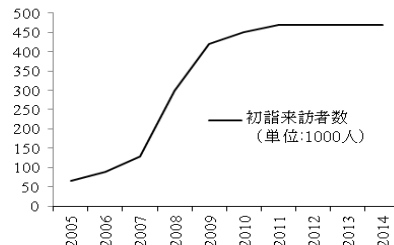


図10 鷲宮神社の初もうで参拝者数

#### 4.8. 年齢層の多様化：軽井沢

軽井沢は、1919年にA.C.ショーによって欧米人の避暑地として見出された。宣教師としての職能が、その口コミの信憑性の高い点によって、宿場町の再生を確実にした。また南校の英語の教師（現東大）ディクソン夫妻が避暑の定宿とした亀谷旅館（現万平ホテル）を中心とした洋風生活文化の普及は、避暑地軽井沢の地位を確固なものとした。ソフト環境の整備としては、宗派を超えたユニオン教会を中心とするコミュニティづくりが大きく機能し、軽井沢独自の文化を形成した。他方、三笠ホテルを中心に、日本人の政財界と文化人のリーダーのコミュニティは、1910～20年代の日本文化の根幹を形成した。具体的には、新渡戸稲造を中心とした軽井沢夏季大学、内村鑑三や山本鼎を中心とした星野温泉の遊学館の活動である。こうした強固な文化基盤は、1945年の敗戦を経て継承され、軽

井沢文化を形成してきた。高度経済成長期の到来と共に、軽井沢の大衆化が始まり 1987年に観光入込数が 800 万人を初めて超えた。以後平均で 800 万人（最低 760 万人）を超えている。この長期の停滞型は、むしろ強化型と認識される。またバブル期の 1987 年に「リゾート法」が成立した。こうした観光産業の法的担保を背景に、大手資本が許認可の緩和をうけて、全国に大型リゾート建設が始まったが、軽井沢では、高品質で収益性の高い星野リゾートがそれにあたる。星野リゾートは、大型リゾートではあるが収容人数も少なくなくりピータも多い高い稼働率を示している。

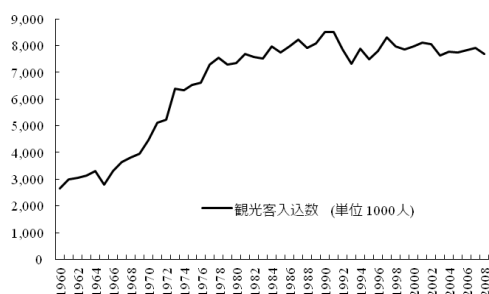


図 12 軽井沢観光客数 TALC

#### 4.9. 総論

観光地のライフサイクルに配慮した地域計画は、以下の 2 つの点で要約される。

日本の各都道府県、市町村の政策で観光振興が挙げられる昨今、現状を捉える手法を欠いている施策が散見される。その背景には、観光学の未成熟な点が挙げられるが、観光先進国アメリカでは、25 年前に一般的観光学テキスト、Tourism Principal, Practice, philosophies(1984)にサイコグラフィックス・ポジションモデルが掲載されている。既に欧米では、そのモデルの課題もあるが有益な視点として認知されている。TALC での発展段階を把握しつつ目的地のサイコグラフィックス・ポジションで観光客の特性を把握し、中期的な増減傾向についてパターンモデルで考察することが肝要である。

観光資源の新しいパラダイムは、情報化社会を背景にメディアによる新しい「まなざし」によって生まれることも、また新しい文化の視点による広義的芸術の育成によって生まれることもある。こうした中では、TALC は、その成果を俯瞰し将来の方向性を探る手法として有効である。

個々ではスペースの関係で、特徴的な汎用性のある事例について紹介した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

中鉢令兒、「観光開発の理論の整理と考察」日本都市学会年報 Vol. 44、査読、2011 年、pp.163-171

[学会発表](計 5 件)

中鉢 令兒、A Study on relationships the TALC model and the PLC model , TTRA2010 Conference, 2010,6

中鉢 令兒、THE ROLE OF TOURISM AFTER THE EAST JAPAN GREAT EARTHQUAKE DISASTER

Event tourism; Kobe, Contents tourism; Furano — , Full Paper CD (Asia Pacific Tourism Association) : Session3A No23 PP. 1-6 : 19th APTA Conference 2013 年

中鉢 令兒・中鉢 華鈴、Study of the Partnership in the Tourism Area Promotion, Full Paper CD (Asia Pacific Tourism Association),pp.467-474 18th APTA Conference 2012 年

中鉢 令兒、観光都市のポジションングに関して - TALC による分析を視点として - 中鉢 令兒、日本都市学会、2012 年

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

中鉢 令兒 (CHUBACHI Reiji)

北海商科大学

研究者番号 : 50188497